

「禅の国際化と私の役割」

曹洞宗宗学研究所員 安藤嘉則

米国における禅の歴史は、もうかれこれ百年にならんとしている。即ち一八九三年、シカゴにおける「世界宗教者会議」において、実に三十五歳という若さの円覚寺派管長の釈宗演が出席・演説し、続いて宗演のもとで参禅していた英語教師鈴木貞太郎（大拙、当時二十七歳）が、

ユーヨークや、ロサンゼルスを中心に禅の普及がなされている。この一世紀の間、まったく精神的風土を異にするかの地にあって、開教師として伝道に努められた先人の言うにいわれぬ労苦には、全く頭の下がる思いがする。

ところでキリスト教的社会・風土にどっぷりつかつた西欧人たちが、このように禅に対しても深い関心をもつに至つたのは、確かにこれら日本の大徳に依るところが大きいのであるが、同時に西欧人たちの内面的な変化によつて、禅へ

の希求がある程度必然的なものであつたことも注意すべきであろう。

この一世紀の間にアメリカのキリスト教会も大きく変化してきた。特にヨーロッパ的キリスト

教会の伝統に対する不信から、W・ハミルトンやH・コックスらによるキリスト教再生運動が展開され、「教会の透明化」が叫ばれたことは大きな波紋を投げかけた。

またあるカトリック神父は「神学は死んだ」と論ずる。これはまさに揺れ動く現代社会と、そこに生きる人々の多様な価値観に対応できず、にいる神学の現状を自己批判した言葉であろう（これは全く現在の仏教学・宗学にもあてはまりそうであるが……）。

また社会的には、ベトナム戦争の敗北によるアメリカ人の意識の変革というのも、大きなものがあつたであろう。ちょうどこの頃、既成のアメリカ社会から逸脱したアウトサイダー、いわゆるヒッピーなどが出現し、青年層におけるサイケデリックな文化が各方面に広がつている。

こうしたキリスト教や現代社会に対して満た



されぬ人々に道を拓いたのが、まさしく禅であったのである。彼らの禅に対するアプローチの仕方は様々である。LSDを常用しながら、あやしげな瞑想にふけるヒッピーたち、一方雲水に身を投じ、禅に真正面から取り組んでゆこうとする者、それぞれであるがこれら的一群の人々とは対照的に、キリスト者からのアプローチがとりわけ注意される。

例えばルーベン・アビト氏は、一九七四年六月、上智大学で行われた連続講演会「禅とキリスト教の対話」の中で、次のように述べている。

「何を申し上げようかちょっと困つております

ますけれども、結局わたしが老師のところに何を学びにきたのかということから始めたいと思います。それは正直に言えれば、仏教のことでもなく禅宗のことでもない。それは何かというと『味わうこと』というふうに言えると思います。……中略……もう

一つ、私がキリスト者として坐禅をやっているのをみて人が私に聞くわけですが、どういう態度で坐っているのかということ。

私は坐禅でよく言われる三つを繰り返しているだけです。すなわち身体を調えること、呼吸を調えること、そして心を調えること

です。只管打坐というのはこれです。これは神を待ち望むことにほかならないと思いま

ます。そして待ち望んでいるものがもうすでに来ている、現れている、働きかけているということが、新しい世界の誕生だと思つております」

アビト氏は当時東大の印哲において印度仏教を研究させていたが、本来はイエズス会の神学生であった。氏の禅に対するアプローチの仕方は、あくまでキリスト者であることを前提とし、キリスト者として神に出会うための有効な手段として坐禅が用いられているのである。キリスト

ト者の中でも特にカトリック系の神父・信者は
禅に関心を示し、約二十年程前には、日本でも
奥多摩の秋川渓谷にカトリックの禅道場、神冥
窟が建てられている。このようなカトリックの

禅に対する接近は、他の諸宗教と対話する姿勢
を打ち出したバチカン第二回公会議によつて促
進されたものであるが、確かに禅の僧堂生活と

カトリックの修道生活とは、千年以上の異なる
歴史にもかかわらず、共通するものが多いと思
われる。

むろん、このような相互の交流について批判
的な意見も多いであろう。日本の伝統的な禅の
宗風を重んずる人々にとつて、このようなキリ
スト者の方便的坐禅は全く受け入れがたいであ



ろうし、またつい先日、ローマ法王がカトリック教徒があまりに東洋の諸宗教に近づくことに批判的な見解を示した、という記事もみたばかりである。

これらの意見は、両者の宗教的なエッセンス

やその文化があまりにも接近しそぎると、逆に相互の宗教的伝統、ひいては相互のもつドグマ・教義さえも損なってしまうという可能性を危惧したものであろう。

これはまさに正論ではあるが、このように固定的な教義にこだわり、排他的である限り、今テーマとしていた「禅の国際化」そして相互理解というものは成り立ち得ないであろう。

まことに教義・ドグマというものは両刃の剣である。それは宗教の根本原理であり、仏教が仏教たりうるものそこにある。しかしこの教義も、仏教者として今ある私がどのようにこれを

受けとめて生活し、そしてどのように実践していくのか、という点が見失われていたならば、何の意味ももたないのでなかろうか。少なくとも仏教そして禅の今日的意義は存在しないと私は思う。

かつて唯識思想を勉強していた頃、三性説なる理論について種々の論書を読んで検討したことがあった。実際に巧みな比喩としトリックが駆使されて、さとりの構造が解明されている。しかしそれは私にとって知識の充足はあつたものの、存在感のない全くの画餅であつたような気がする。この教義を具体的にどう生かしていくのか、そして生活していくのか、という点が、当時の私には全く不明であつたからである。

この点について去年豊山派宗務庁における同和研究会で、駒沢大学の奈良康明先生がなされた業論に関する研究発表は、私にとって実に示唆に富む内容であった。とりわけ、業論を一般

的業論と自覺的（実存的）業論に分けるという視点。そして「すべては私の業だ」と受け取め、そこから業を克服する宗教的生き方を生み出す「自覺的業論」も、それがひとたび一般化されたとき、差別につながっていく、という分析は、私たちの教理に対する平面的な理解に重要な提言を与えていたように思えるのである。

まさにそれぞれの教理は、祖師方がその宗教的体験の深みから発露した表面的部分であつて、我々はその教理の奥にある本来の実存的基本盤につねに立ち返つて追体験しなければならない。これは実際のところ容易ではないが、常にその方向を見失わずに仏教者として心したいものである（研究者としてではなく）。

だいぶ脇道にそれたかもしれないが、アメリカの禅について再び一言したい。ニューヨークに二つの禅堂を開設した臨済宗のある師家は、アメリカの禅を、祖師が数多く輩出した唐代の

禅に似たものがあると述べている。これは少し（というよりはかなり）ほめすぎのきらいもあるが、日本における曹洞・臨済の僧堂生活が、住職になるための一手続きに堕し、もっぱら葬祭や仏教学ばかりが前面に出ている現状を見る限り、自發的主体的に僧堂へ飛び込んでくるアメリカの禅は、本来のあり方に近いのかかもしれない。そして伝統にとらわれない、新しい時代に対応すべき禅のあり方が、そこに生まれつつあるのかもしれない。これが日本における禅の新しい教化に有用であるか、否か、まだ一度もその地を踏んだことのない私が語るべき資格はもたないが、もしその機会が与えられるならば、是非かような視点をもつて、アメリカの禅を体験してみたい。そして願わくは、自己閉鎖的な日本の禅のあり方に対しても、何か一つでも活性化させられるものを提示できれば、と思う次第である。